かたつむり

鈴木三重吉

一

トゥロットのお母ちやまは、朝、いろんな人たちと一しよに、馬車でそとへお出かけになりました。ド・ヴレーさんといふよそのをぢさまが、馬のたづなをとり、もう一人のをぢさまがラッパをならして、みんなでたのしさうに出ていきました。トゥロットは、ちひさくて、足手まといになるので別荘にのこされました。

トゥロットは、女中のジャンヌと二人であそぶつもりでゐたのですのに、お母ちやまはトゥロットがたいくつするだらうとおもつて、先生のミスに、来てやつ

て下さいとおたのみになつたものです。トゥロットは、あゝあと、がつかりしました。お母ちやまは、トゥロットにさうだんもなさらないで、いやな人をおよびになるのですからたまりません。

ミスはお庭のおくのベンチにこしかけて、偉大なお鼻の上にめがねをのつけて、顔中のすぢ一つさへうごかさないで、自動器械のやうに、さく〳〵とご本をめくつてゐます。トゥロットは、ミスにしかられないやうに、何かわるくないことをして、時間をつぶさなければなりません。それでさん〴〵かんがへて、けふはお庭の中をくはしく見て歩いてみようとおもひつきま

した。
　今は、庭もかなりあれてゐて、砂利だの、やせた芝のごみだの、木のきれはしなぞが、ちらかつたりしてゐますが、でもまん中どころにあるバラの木だけは、人の目を引きつけないではおきません。とてもすばらしい、いゝバラの木で、とき〴〵花がさきます。けふも、ちようど一つ、大きくさきひらいてゐます。トゥロットは、その花をうつとりと、いろんな方がくからながめました。それは何ともいへない、きれいな花です。
　と、そのうちに、きふにトゥロットの目は、大きく

まるくなつて、じつと一ところを見すゑました。ほう、こはいものがゐる。バラの葉の上にかたつむりがのそ〳〵うごいてゐます。おゝ、いやなやつ。うしろにきら〳〵したあとをひいて、頭を右にまはしたり左にまはしたり、つのを出したり、ひつこめたりしてゐます。ちつとも、ゑんりよなんかしてゐやしません。

トゥロットは、しばらく、じつと見つめたのちに、するどい声をたてゝミスをよびました。

「ミス、来てごらんなさい。」

ミスは大きな鼻を上げ、ご本をかゝへて、四またぎでトゥロットのそばへ来ました。

「何です。」

トゥロットは、おゝこはい〳〵といふやうに、ゆびさしました。

「かたつむりぢやありませんか。」

それはわかつてゐます。トゥロットが見たつてかたつむりです。

「この軟体動物は植物に害を加へます。殺してもかまひません。」

トゥロットは、けつこうなおゆるしをいたゞきました。しかし、こいつをつかまへるのはたまりません。とてもいやなことです。

「とつて下さいな、ミス。」

ミスは、たちまち、けはしい目つきをしました。

「なぜわたしがそれをつかまへるのです。なぜあなたがつかまへないのです。それがバラを害する以上は、あなたがつかまへるつかまへないは、あなたの幸福にえいきようするのですよ。あなたの幸福を保護するのは、あなたでなければならないはずです。」

トゥロットはためいきをつきました。ミスが一ど言ひ出したら、いくら口ごたへをしたつてだめです。で、トゥロットは手をのべかけて、ひゝい、といふやうにその手をひつこめました。しかししまひには、と

う〳〵かたつむりのからの上にゆびをつけました。かたつむりは、びつくりして、すつかり家(うち)の中へひつこんでしまひました。もう何も出ては来ません。トゥロットは、ずつと息がらくになりました。しかし、けつきよく同じことでした。いくら何にも出ないからつて、じたい、こんな動物は、とてもすきではないからです。

　トゥロットは、つかみ上げはしたものゝ、さてどうしたらいゝかと、もじ〳〵しました。あゝ、いゝことがある。トゥロットは、それをそつと、へいごしにおとなりのお庭の中へなげこまうとおもつて、手をうし

ろへふり上げました。すると、ミスが、いきなりくびすぢをおさへつけて、こはい声で言ひました。

「トゥロット、ひとの不幸のなかにじぶんの幸(さいはひ)をもとめることは禁じられてゐます。この動物をおとなりへなげれば、おとなりの植物を食べます。そんなことをするのは不正です。」

「ぢやア、どうすればいゝの？」

「おつぶしなさい、足で。」

トゥロットは、こまつて、手の中のかたつむりを見つめました。足でつぶす……ふう、このからが、ぐしやりとなるのをかんがへるだけでも、こいつの肉が、

くつの底でぐちやぐちやになるのをかんがへるだけでも、むねがわるくなつて来ます。あゝ、井戸の中へなげこまうかしら。さうだ。その方がよつぽどましだ。

二

トゥロットはさうしようときめかけました。しかし、それも何だか気がひけます。だつて、あはれなこのかたつむりは、何もわるいことをしたわけではありません。こいつは植物の葉なぞの上をうごいて、日光をあ

びて、ぐるりと一まはりして来て、お食事をするのがたのしみなのです。きつとさうです、でも、バラを食べる。バラに害をする。やつぱり、ばつしてやらなければいけない。

しかし、だれだつてものを食べます。このかたつむりだつて、バラの上をはひまはつてゐるのは悪気があつてではありません。おなかゞすいてゐるからです。からだをやしなはなければならないからです。それをばつしるといふのはひどいやうです。

でも人は、を牛や羊や小羊を殺します。あんなに、かなしい声でなく、かはいさうな小羊をも殺します。

たのしいうたをうたふ森の鳥をでもころします。そんなものたちこそ、かたつむりなんかより、よつぽどおもしろい動物で、そして、わるぎなんてものはちつとももつてはゐません。それでも人はそれをみんな殺すのです。だから、このかたつむりだつて……

トゥロットはなげつけて足でふみつぶさうとして、手をふりあげました。でも、やつぱり手をおろしました。手の中にはからをにぎつてゐるのです。

さうだ、人はよくどんな動物でも殺すけれど、それは食べるために殺すのだ。人間のためにいるから殺すのだ。せんにお父さまは、よそのいたづらつ子が、ぱ、

ちんこで小鳥をうちおとしたときに、その子の耳をおひつぱりになつたことがある。お父さまは、たいそうおおこりになつた。でも小鳥はくだものをツつきます。羊だつて牛だつて草をたべたり、きれいな花をむしつて食べたりします。いつかもめ牛が、一どにマーガレットの花を五十ばかりもひつこぬいたことがありますしかし、そのくらゐのことでその牛を殺していゝかしら。

トゥロットは、あゝでもない、かうでもないと、こねくりかへしてかんがへたあげく、どうにも、とりとめがつかなくなつてきました。すこし泣きたくもなり

ました。そして、つまるところ、このかたつむりをふみつぶすといふことは、大きな罪ををかすやうな気がしてなりません。しかし、こいつを、このまゝにしておけば、バラの木がいためられるのです。あゝあ、どうしたらいゝだらうと、トゥロットは、ひどくこまつて頭がぼうとなりかけました。

　でも、かういふことだけは、ぼんやりなりにも言へるやうです。羊を殺すのはわるい。しかし食べるためになら殺してもわるくはない。かたつむりをころすのはわるい。でも食べ……

　トゥロットは、びつくりして、じつと手の中のかた

つむりをながめました。お〻いやだ。そんなことは、とても出来つこはない。お〻、いやだ〱。ミスはとほくから、あざけるやうなようすをして見てゐます。トゥロットがどう結末をつけるかと、ひざの上にごほんをのせて、そり身になつて見てゐるのです。

三

そのミスが、ふいに、針にでもつきさゝれたやうに、

とび上り、かなきりごゑをはり上げて、ご本をすつとばしてとんで来ました。

　トゥロットは、かたつむりを手でぐいと、のどのおくにおしこんだのです。そして、目をつぶつてのみこんでしまつたのです。

「まあ、とんでもない。……ばかなことを。……どうしてそんなむちやをするのです。ほんとにあきれた。なんておそろしいことをするのです。」

　ミスはひつくりかへるほどびつくりして、お部屋へかへつても、フランス語とイギリス語を、ごつちやに、くちびるの上でぶつけ合せました。トゥロットは平気

で、にはか雨が来たのを、けろんとして見てゐました。
しかし、じつをいふと、胃ぶくろの中がどうなるか、それがすこし気がゝりでした。いやにグウグウと、へんな音がします。きつとかたつむりが、のそ〳〵歩いてゐるのにちがひありません。かうおもふとすこし胸がむかついて来ました。
でも、まあそれだけのことです。かたつむりはどうせ消化されてしまふでせう。
そこでトゥロットは、雨があがると、またお庭へ出ました。そして、まへよりももつとふかい愛情をもつてバラを見入りました。あはれなかたつむりを、むご

たらしくふみつぶしもせず、そしてこのうつくしいバラをも、すつかり保護してやつたことが、トゥロットにはとても〱とくいでした。

底本：「日本児童文学大系　第一〇巻」ほるぷ出版
　　１９７８（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「鈴木三重吉童話全集　第五巻」文泉堂書店
　　１９７５（昭和50）年9月
初出：「赤い鳥」赤い鳥社
　　１９２９（昭和４）年３月
入力：tatsuki
校正：林　幸雄
２００７年2月19日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。